種子消毒・チャート

防除方法

１．種子は、種子伝染性の病害であるばか苗病、心枯線虫病、もみ枯細菌病等が発生していないほ場から採種したものを用いる。
２．種子は風選（唐箕選）を行った後、下表により塩水選を行う。

	水　稲 うるち	水 稲 も ち
比　　重 食塩kg／水10㍑	1.10 1.55	1.06 0.90

塩水選後は十分水洗いする。
３．種子消毒法
　薬剤一覧表を参考にして、使用薬剤と使用方法を選択する。さらに下記の点にも留意する。
(1)イネシンガレセンチュウ対象
　薬剤以外に温湯消毒法（乾燥籾を57～58℃の温湯で15分間浸した後、直ちに冷水で冷やす）でも防除が可能である。
(2)その他の病害対象
　薬付け後の種籾は、種籾量の約２倍の停滞水に２～４日間浸種した後に催芽、は種する。
1)湿粉衣法
　湿粉衣後は５～24時間風乾してから停滞水に浸漬する。停滞水から引上げるときに薬剤をなるべくゆすぎ落とす。
2)低濃度長時間浸漬法
　浸漬後は薬液を切って５～24時間風乾してから停滞水に浸漬する。停滞水から引上げるときは薬液をなるべくゆすぎ落す。
3)高濃度短時間浸漬法
　浸漬後は薬液を切って５～24時間風乾してから停滞水に浸漬する。停滞水から引上げるときは薬液をなるべくゆすぎ落とす。
4)吹き付け法
　専用の種子消毒機を用いて吹きつける。吹き付け後は５～24時間風乾してから停滞水に浸漬する。
停滞水から引き上げるときは薬液をなるべくゆすぎ落とす。
・種子消毒体系については種子消毒チャートの項を参照のこと。

防除上の注意事項

１．特に、ばか苗病菌は胞子が30m位まで散飛し種子伝染するので、種子を採る時には付近の発病にも注意する。また、開花中のもみ感染を防止するため、出穂期以前に発病株を抜取り処分しておく。
２．低濃度長時間浸漬は同じ薬液を２回、高濃度短時間浸漬では同じ薬液を８回くり返して使用できる。
３．種籾と浸漬消毒量の容量比は、１：１以上とし、種籾を入れる袋は目のあらい網袋を使用する。
４．浸漬・消毒時の水温を、20℃前後に保つように努める（10℃以下では薬効が不十分になることが多く、また25℃以上ではばか苗病やもみ枯細菌病などが発生しやすくなるので注意する）。
５．低濃度長時間浸漬の場合は必ず浸漬中に２～３回撹拌する。
６．薬剤処理後は停滞水に２～４日間浸種しないと効果が落ちる。
７．薬剤処理した種籾は食用飼料には使用しない。
８．トリフミン剤は、箱育苗でもみの根上がりを生ずることがあるので、これを防止するため、は種前に床土に十分（１箱当たり１㍑以上）灌水し、覆土量は１箱当たり 600ml（もみが見えなくなってから５～６㎜厚さ）以上とする。
９．生物農薬使用時は、薬剤処理後の過度の風乾により効果が劣る場合があるので注意する。
10．多量の廃液は、専用の農薬廃液処理装置で処理するか、産業廃棄物処理業者に処理を依頼する。
11．廃液処理は「水稲種子消毒廃液処理方法」改訂版（ＪＡ全農）が参考になる。

種子消毒チャート

種子の選別

種子消毒は ①湿粉衣法、②高濃度短時間浸漬法、③低濃度長時間浸漬法、④吹き付け法のいずれか一つを選択して行う。なお、それぞれの薬剤の登録内容に応じて、方法を選択する。

塩 水 選

↓

水　　洗　　塩分が残らないよう十分水洗いする。

↓

水　　切

↓

薬剤処理と消毒

①湿粉衣法
②高濃度短時間浸漬法
④吹き付け法

薬剤粉衣、薬液浸漬または吹き付け
＜主な対象病害＞
ばか苗病
もみ枯細菌病

別表の種子消毒薬剤一覧表を参照する

↓

風　　乾

防除効果を高めるため５～24時間行う

↓

浸　　種

ｲﾈｼﾝｶﾞﾚｾﾝﾁｭｳ対象剤の薬液に規定の時間浸漬する。その後、必要であれば水を入れ替え、上記薬液とあわせて２～４日間になるように浸漬する。

ただし、スミチオン乳剤では鳩胸程を過ぎた種子を処理すると生育が抑制される場合があるので注意する。

③低濃度長時間浸漬法

薬液浸漬
＜主な対象病害＞
ばか苗病
もみ枯細菌病
ｲﾈｼﾝｶﾞﾚｾﾝﾁｭｳ

別表の種子消毒薬剤一覧表を参照する

↓

風　　乾

防除効果を高めるため５～24時間行う

↓

浸　　種

停滞水に２～４日間浸漬する。

↓

催芽

催　　芽　　必要以上に高温とならないように注意する。
また、生物農薬では催芽時に処理する方法もある。

↓

は　　種